

麻酔科医の担当症例が急増

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 31 》



野中 明彦
麻酔科科長

高齢者や合併症がある重症患者の手術の増加や、救命救急センターや婦人科への患者の集中に伴い、県立中央病院の麻酔科医が担当する症例数は急増している。2011年の症例数は2733件で、01年（1963件）から770件、約1・4倍増えた。同病院では全身麻酔のすべてを麻酔科医が担当。外科、整形外科、婦人科、小児外科、心臓外科、脳外科での手術が多く、年間5千件を超える手術の約半数で、麻酔科医が麻酔管理を行っている。

専門医確保が急務

県立中央病院の麻酔科医担当症例数



麻酔科科長の野中明彦医師によると、近年、手術・麻酔の安全性が高まり、一般的に、手術中に亡くなるケースは10万人に3人、そのうち麻酔が原因で亡くなるケースは10万人に1人といわれている。

新薬の登場もその理由の一つ。吸入麻酔薬セボフルラン、静脈麻酔薬プロポフォール、鎮痛薬レミフェンタニルは作用時間が短く、

術後すぐに目覚め、意識がはっきりするという。これらにより術後の吐き気や震えといった合併症も減少した。術後の状態がよく、できるだけ早く体を動かすことが、身体機能の早期回復につながるという。

麻酔科医が担当する症例数が増える一方で同病院の麻酔科医は6人と、01年より2人減少。院内で行われるすべての麻酔を麻酔科医が行うことは難しく、脊椎くも膜下麻酔のほとんどは各診療科の執刀医らが行っているのが現状だ。

麻酔科医は麻酔薬の投与だけでなく、輸血や輸液、患者の呼吸や循環などの全身管理を行う。重篤な合併症がある場合や、手術中に緊急事態が発生した場合などは、麻酔科医による的確な処置が必要になる。

野中医師は「患者さんが無事に手術を終え、術後の痛みや合併症がなく退院してもらえよう努めている。増加する手術の麻酔をより安全に効率よく行うためには専門医の確保が急務」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します